曹洞宗ゆかりの地・北陸の寺々と大圓和尚の思い出

金沢大乗寺に東隆眞老師を訪ねて

ご存知のように、大本山永平寺や總持寺祖院をはじめ、高祖道元禅師や太祖瑩山禅師は北陸の地から曹洞宗を広めてきました。いまもこの二寺をはじめ、大乗寺や永光寺（ようこうじ）など、いくつもの名刹がその姿を残しています。

これからの善光寺のあり方を求めて、博志住職は平成十八年六月のある日、檀家総代の東郷敏氏とともに、この北陸の大乗寺と永光寺を訪ねました。くしくも大乗寺には先代大圓和尚の学生時代からの親友でもあり、善光寺留学生育英会の理事でもある東隆眞老師が山主として執務にあたっておられます。東老師はまた、永平寺で修行した瑩山禅師が總持寺を開く前に創立し、曹洞宗の歴史でも意味深い名刹永光寺の研究、調査に関わられ、五老峯永光寺復興奉賛会会長でもあります。創成期の曹洞宗における興味深いお話と善光寺のあるべき方向を伺うことができた貴重な時間でした。

●師の系譜を大切にする曹洞宗

東郷　東老師の論文や著作はいろいろなところでお見受けするのですが、そのなかでも『旅の

手帖　増刊・彩都』という雑誌のなかで写真家の織作峰子さんと対談されているものがわかりやすく、拝見させていただきました。

東老師　大乗寺のご開山は徹通義介禅師です。このお方は道元禅師のお弟子で、やがて懐奘禅師（永平寺第二世）の法嗣となり、永平寺の第三世に就きました。道元禅師がお亡くなりになったあと、道元禅師の弟子たちの横の関係を巡って、派閥的な、感情的な、思想的なわだかまりが生まれてしまいました。要するにお互いに自分が正統派で、自分が道元禅師の一番の弟子だと思いたい、思わせたいわけです。そういうことで暗雲が立ちこめていたと思います。徹通禅師もそのなかに巻き込まれてしまいました。徹通禅師は長い間、永平寺にいましたから、そのときはもう七十歳ぐらいでした。永平寺を出て加賀の地へ下りてきてこの大乗寺を開くわけです。

東隆眞老師

●創成期の曹洞宗の系譜

天童如浄
道　元（永平寺）
孤雲懐奘
徹通義介
瑩山紹瑾
峨山韶碩（總持寺）
明峯素哲（大乗寺）（永光寺）

瑩山禅師は徹通禅師のお弟子なのですが、歳が離れていて、そのときはまだ二十歳前後、ちょうど孫とおじいさんのような感じです。師匠の徹通禅師の後ろ姿を見ながら、瑩山禅師もその後について、永平寺から下りてくるわけです。そして、瑩山禅師は師匠がいかに道元禅師とつながっているか、正当な師匠であるかということを証明しなければいけません。そうしないと自分の立場も疑われることになるかも知れない。

師匠が曹洞宗の正統であるということをまず立証するわけです。それが伝光録であった。また開山堂の祖師方の祀り方です。開山堂といいますと、そのお寺のご開山さん、創業者だけを奉るのが普通ですけれど、大乗寺は違っています。三人の霊骨を収めています。永光寺もそうなんです。永光寺は五老峯といいますが、五人の僧を祀っています。道元禅師が宋で教えを受けた天童如浄禅師が高祖です。その次に道元禅師がきて、懐奘禅師、徹通禅師、瑩山禅師と続きます。

東郷　祖師の系譜を大切にするというのは瑩山禅師の思想ともいえますね。

東老師　いま風のいい方をすれば、師匠が不当に差別を受けたり、いじめを受けたりされたことに対して、師匠の気持ちを瑩山禅師は自分なりに受け止めて、それをさらに曹洞宗の発展に結びつけようとするのです。永光寺の次に總持

寺を開くのですが、總持寺でもそうした思想が表れています。よく知らない人は「太祖（たいそ）堂」と勘違いしているんですが、あそこは「大祖（だいそ）堂」といいます。複数のお祖師さまがたがおまつりしてある。つまり、ずっとつながっているんだと。これが瑩山禅師の宗乗です。宿願です。それだけでなく、總持寺の場合、瑩山禅師はこんなこともいっています。お弟子の峨山さまに總持寺を譲るについて、「韜光晦迹することを許さず、宗風を一興せよ」。普通、禅寺のお坊さんは、いい影響を周りの人たちに与えて自分はスーッと世間から消えていく。足跡を残さない。それを美徳としています。ところが瑩山禅師は弟子の峨山禅師にそれではいけないといっています。そして宗風を一興せよと。道元禅師、徹通禅師、自分のところに至っている正伝の仏法の流れを興隆させてほしいというのが瑩山禅師の思いなのです。それで峨山禅師はその通り見事に実行したわけです。

ですから、徹通禅師の思いが瑩山禅師に伝わり、瑩山禅師はさらに弟子をつくり、寺を建て、なかでも明峯素哲禅師と峨山韶碩禅師の二人に期待をかけました。大乗寺と永光寺は明峯禅師の系統です。明峯禅師の系統は地味です。伽藍を建てるってこともちろんやりますが、それよりもいわゆる正法眼蔵の教えをひたすら修行するといったような傾向が強く表れています。峨山禅師の場合は、曹洞宗を教団として組織化するのに手腕を奮いました。曹洞宗は現在約一万五千か寺ですが、江戸時代には一万七千か寺あまりもありました。その八割がたは峨山派、總持寺の系統ですから、その原動力は峨山禅師にあるといってもいいでしょう。徹通禅師が永平寺から出たその心中を瑩山禅師がよく受け止めて、そしてそれを自分の弟子である峨山と明峯に伝えたことがいまの曹洞宗の源流を築いて

大乗寺法堂にて

いるのでしょう。

東郷　大圓和尚もかねがね「宗祖を通じて釈尊に還る」とよく語る場面がありましたが、まさにここにつながるのではないかと思います。

●大圓和尚の遺したもの

博志住職　師匠が東老師に毎日のように長い電話をおかけしていたことが子どものときの記憶として残っていますが、東老師との深いご縁のなかで師匠がどのようなことを考えていたのかをお聞きしたいのですが。

東老師　黒田さんは曹洞宗の申し子といってもいいと思います。そして、八面六臂といいますか、活躍をして、黒田さんは力尽き根尽きて倒れたと思います。黒田さんの理想や具体的な行動は『成寿』のなかに出ています。あれを丹念に読みますと、黒田さんの思いというのがどこにあるかよくわかります。

ただ私は、黒田さんから、こういうことを聞いたことがありました。善光寺を興した頃です。なかなかお参りがないと。いろいろな会を興して、お参りしてもらおうと努力しても、なかなか集まらない。しかし、いろいろな会を、お参りの方があってもなくてもやっているうちに、来ていただけるようになったといってました。その不退転の気持ちですよね。

東郷　確か、善光寺開創三十周年のときにご老師が『成寿』にこの行事のことを書いておられましたね。

東老師　黒田さんは正しい道を歩いたと思います。着眼点も本質をついている。「宗祖に還る」「宗祖を通じて釈尊に還る」。これが黒田さんの発想のいちばんの根本です。お寺では檀信徒の方々をお相手することが多いと思いますが、しかし、よくよく見てみますと、黒田さんは宗門の命脈である坐禅や修行を決して忘れていませんでしたと思います。黒田さんの生前の最後の『成寿』を拝見しましたが、あれはタイですか、坐禅を指導しているではないですか。あの場面を見てすぐそのことがわかる。

博志住職　改めて原点に還るということですね。

東老師　もうひとついいますと、海外での経験で培ったものもあります。アメリカにマウンテン禅センターをつくられたお兄さん、前角博雄老師がいらっしゃいます。考えてみますと、このお方はけた外れにすごい業績を残した人です。黒田さんはその影響も受けていると思いますね。実際お兄さんのもとへ行っていろいろお手伝いしながら、海外布教の厳しさを身をもって経験したと思います。

東郷　東老師は育英会が生まれたときから理事をなさっていますが、大圓和尚から何かご相談がありましたか。

東老師　べつに相談はありませんでした。黒田

タイで坐禅を指導する在りし日の大圓和尚

さん御自身が発案したようです。自分自身が托鉢したり、タイやアメリカへ行っていろいろ苦労を経験しました。そこで若い人材を育成するためには何が必要か、自分がいちばん苦労したことといえば、結局、経済的な問題でしょうから、そういう点でフォローすることができればいいかなということで育英会をつくったと思います。当初は苦労していたようです。売名行為などといわれ、周囲から理解されるまでかなり時間がかかったようです。しかし私は、「止めちゃダメだ」と。つらいでしょうし、厳しいでしょうけれどやってくれと。あなたのやっていることは決して間違ってないから、そのうち必ずみなさんが理解してくれるから止めちゃダメだと、説得したことが思い出に残っています。

東郷　育英会にしても、清水寺の瑩山禅師顕彰碑にしても、すべて東老師がパートナーとして関わっていただいている。大圓和尚はいつも「オレの頭は帽子の台だけで、中身は東老師にある」といっていました。

東老師　利用されて光栄ですよ（笑）。しかし、実はそうではありません。ひらめきとか、見通す力とか、黒田さんはすごいものを持っています。黒田さんの言っていること、やったことはほとんど失敗していないのではありませんか。みんなうまくいっています。

東郷　他の人と違うのは、信念、理念、哲学が私にはあって、これは死ぬまで変えないとよくいっていました。その一つが「祖師を通して釈尊に還る」で、いま一つが「仏道を通して、世界平和に貢献する」でした。そして、その具体的な行動は「身を削り人に尽くさんスリコギのその味知れる人ぞ尊し」、このお心でした。

東老師　私も大いに彼から啓蒙、啓発されました。あの人の純粋さにです。ちょっと見た感じではそんなふうに思えないかも知れないのですが、彼は非常に純粋で謙虚でした。一見派手な事業家のようなタイプに見られがちですが、個人の内面的なものには純粋なところがありました。話していることとか、態度とか、何かにつけてそうでした。これはみなさんもよくご存知だと思いますが、たとえば旅行に行くと朝四時には起きて日記を書いたり、お経をあげたりしているんです。そのときの彼の表情はいつもと

は全く違っていました。一人の仏教僧。そのなかに彼の本質が出ています。

大学時代も彼は洒落た人で、背広を着たり、ベレー帽をかぶったりしていました。美術にも非常に関心があって、目利きの鋭さも潜在的に培ってきたものでしょう。のみならず、一宗教者としての、坊さんとしての純粋性とか、すがすがしさとか、謙虚さという点の黒田さんを私は知っています。でも、みんなと話していても全然そんな素振りは見せないんです。

それは奥さんが支えていらっしゃるというか、奥さんが非常に大きな力となっておられます。陰にいて黙っていらして、それでいてよく物事を的確に見ておられる。やはり奥さんは黒田さんの最大のブレーンですね。

●これからの時代に求められるもの

博志住職　いろいろと貴重なお話をお聞かせくださいまして、ありがとうございました。私も知らない善光寺の歴史や師匠の姿にも触れることができました。最後に、これから宗教人として、また、善光寺の住職として、どのようなテーマで、どのような役割を担っていかなければならないか、お聞かせいただけるでしょうか。

東老師　それは私の問題でもありますし、博志さんの問題でもあります。そして多くの仏教僧侶、仏教に関わる人たちにも共通の課題であると思います。

私の場合ですと、この古い歴史をもつお寺には専門僧堂があります。僧堂はある意味で実験室のような、教室のようなものです。つまり、ここで人材を育成して、しかるべき宗門僧侶を世の中に打ち出すという役割があるわけです。私にとって、これが今の私のいちばんのポイントです。政治家でも、社会運動家でもない私には、仏教僧として何ができるか。私の場合、こ

講義風景

の大乗寺で伝統を守りながら人材を養成して、さらに現代との関わりのなかで、多くの人々に仏教をうけとめていただくということです。

博志さんの場合、現にもう黒田さんがあれだけのものを創られて、遺されているわけですから、その中にすべてが入っていると私は思います。「お前はこういうふうにしなさい」と。「私はこういうふうにやってきたんだ」と。だから、お前も、いのちがけでそれをやってみろ、できるかと。

私はいつも修行僧たちに言うことが二つ、三つあります。ひとつは「坊さんらしいことをやれ」と。坊さんが坊さんらしくないことをやってはいけない。つまり、坐禅をするとか、おつとめをするとか、作務をするとか、そういう基本的なことをきちんとやることです。

もう一つは「坊さんとして世の中にどういうふうに尽くすことができるか」。そのことをつね

に考えながら修行してほしいと。どういうことを自分がやったらいいか、趣味とか、技術とか、資格とか、能力とか、教養とかいろいろあります。それを総合して、自分に何ができるかということをここで沈思黙考して修行してほしい。そして三番目は、いま、言ったようなことを具体化するために「誓願を持って行動してほしい」、そのことを常に頭のなかにめぐらして考えてほしいということです。

これは僧堂でのことで、僧堂でのやりかたがそのままストレートに通用するわけではありません。しかし、僧侶にとって、僧堂生活はやはり原点だと思います。

坊さんらしく、いかに世の中に尽くしていくか。それにはいろいろなやりかたがありますから、こうしろ、ああしろではない、必ずそういう「願い」を持っていれば実現できます。それをやらない限り仏教は社会的信用、信頼を失っていきます。

それから、私は、この大乗寺をつねにオープンにしています。扉は、いつも開かれています。どこからでも入れる。この物騒な世の中ですから、非常に危険ですけれども、しかし、お寺というものは、オープンなもの、みんなのものである。とにかくこの境内に入って来るだけでも気分が違うといいます。気持ちが安まる。落ちつく。心が洗われる。この感想は日本人も外国人もおなじです。

博志さんも同じです。基本はお師匠さんが全部「こうやるんだ」と自分で実験して見せてくれたわけですから、それをよく思慮して、毎日毎日、お師匠さんの御恩に報いるにはどうやったらいいかを考えて、考えて懸命につとめていけば、自ずから黒田さんが守ってくれると思います。